

二十年前の記憶

小倉 一純

四十二歳、男の厄年を迎え、会社員人生から足を洗うことを決意した。精神的にも、肉体的にも、もう限界であった。

実家に戻ってから、ブラブラしていたが、毎朝の散歩だけは欠かすことがなかった。

我家は、小田急線の急行の止まる駅が最寄りで、場所は多摩丘陵の一面である。

川崎市だが、その地形から、このあたりも多摩と呼ばれている。アップダウンの多い丘陵地で、小さな山を雛壇に造成した住宅街に我家は建っている。

そんな我家から六メートル道路を少し下ったところに、高い擁壁の住宅がある。

この家の、かつての主の話をしようと思う。

僕の実家では、ケンタという小型犬を飼っていた。町田の東急ハンズのペットショップから連れて来た。もちろん、会計は済ませている。そのケンタの散歩が、日々の一大行事であった。ヨレヨレになった僕には、それが

精一杯の日課だった。

真夏の早朝五時といえ外はもう明るい。
ケンタを連れて僕らは坂の上から下って行く。
すると、毎朝決まって、そんな僕らを迎える
かのように、着物の老人が、こちらを睨んで
キセルを吹かせている。

「おはようございます」

会釈をするとそのおじさんも

「おうッ」

と、ちよつとぶっきらぼうにあいさつを返
してくれる。

「あんた、毎日、家にいるのか？」

「あッ、調子悪くて、会社辞めたんスよッ」

「大変だな、サラリーマンも」

こんな短い会話をしたこともあった。

そんな僕の散歩は、半年以上も続いた。

おじさんの年齢は僕よりふた回りぐらい上
であつたと思う。僕の親に近い世代である。

そのおじさんの商売は、実は、ヤクザであ
つた。正確にいうと、右翼である。

その筋の人といっても、ヤクザ、テキヤ、右翼などと様々な種類があるのだと思うが、当時は総称して、「暴力団」と呼んでいた。

おじさんは、商売柄、この場所を選んで越してきたのではないだろうか。彼の住宅は擁壁が高く、いつてみれば、人工の要塞である。外敵の突入から、自分の家族を守ることができる。

ある時を境に、おじさんはプツリと姿を消してしまった。

その日、何気なく新聞を手に取ると、
「右翼の男、〇〇銀行本店に突入。金融商品の取引に失敗か。即日、逮捕される」

こんなタイトルが目飛び込んできた。姓名も掲載されていたので、すぐに分かった。おじさんの視点を借りれば、「都市銀行のエリート行員らに天誅を下した」のではないだろうか。

今もこの家を見上げる度にそんな二十年前の記憶がふと蘇る。